

## 保育構想案

奈良教育大学附属幼保連携型認定こども園  
養護教諭・なかよしタイム主任：清水 智佳子

1. 活動名 みんなで育てたお花を、新しいこども園を植えよう  
～自分の行動がみんなの笑顔になる(人の役に立つ)喜び～

なかよしタイム(長時間・預かり保育)4・5歳児 約 24名(2号児+1号児)

・園舎の改修工事、乳児棟の建設のために、昨年の10月から、仮園舎で生活している。  
・教育時間前後の時間や、長期休業中(夏休み・冬休み・春休み)の1日を、4・5歳児の異年齢で保育を行っており、その時間を「なかよしタイム」と本園では呼んでいる。

## 2. 子どもの姿と読み取り

- ・昨年度末の春休みに1年のお楽しみ会をした際には、3・4・5歳児が集まり、それぞれの学年で歌っている歌を披露しあったり、みんなでポップコーンを食べたりした。その際、ポップコーンが乾燥したトウモロコシであることを初めて知る子どもいた。1年を通して、一緒に過ごしてきた異年齢の友達と過ごす楽しさを感じている。
- ・4月以降、登園降園中、園舎の工事が行われており、トラックやダンプカー、クレーン車などがあつた、新しい建物が建ってきているなど教えてくれる時もある。その際に、花壇がなかったことに気づいて話す子どももいた。
- ・昨年、ワタやフウセンカズラの種を植え、たくさん種が採れた。その種をどうしようかという話題を出した際に、「小さい組にあげたい」「また、フウセンカズラを育てたい」「アサガオを育てたい」「ほかの花を育てたい」などの話が出てきた。ちょうどそのころ、折り紙でハート型の模様の包みを折れるという子どもが、折り方を周りの友達に教えていくつも折っていた。そこで、たくさんのフウセンカズラの種を2歳児・満3歳児のクラスの友達に分けてあげたらどうかと提案してみた。すると、「種が小さいし、のどにつめたらあかんから」「のみこんだらあかんから」「袋に入れてあげたらいい」「ハートの折り紙に入れてあげたらいい」との声が上がり、フウセンカズラを5個ずつ小さい袋に入れ、それを、ハート模様の包みに入れてメッセージを書いて届けることになった。一番小さな学年の友達のことを思って、どう種を届けたらよいか考えたり、相手のことを思いながら作ったりする姿もみられてきている。
- ・5月上旬、なかよしタイムのみんなで、夏休みも一緒に過ごすので、どんな植物を育てたいかという話題になった際、フウセンカズラ、アサガオ、エダマメ、ワタ、ポップコーンのトウモロコシなど今までの経験から知っている種類を話していた。また、工事中の園舎のことも思い出し、「前のこども園の花壇に植える花の種も育ていいんちゃう?」という話も出て、花の種も育てるために、センニチコウ、ポンポンアスター、フレンチマリーゴールド、ラベンダーなど様々な種類の種を準備し植えることにした。土は、大学農場から分けていただいた腐葉土を使用した。腐葉土をふるいにかけて、種を植えやすいふわふわの土を自分たちでつくることにした。土をふるいかけると、ふわふわの土ができて、その手触りや感触に驚いたり喜んだりしていた。土の中から虫の幼虫やミミズ、腐ったサツマイモなどを見つけて、触ったり、おいをかいたりして、興味をもって見たりしていた。そのあと、ミミズに関する絵本を一緒に読んで、ミミズが土を柔らかくしていることも知り、より腐葉土に関心をもっていった。そして5日ほどかけて、ふわふわの土づくりを続けて楽しんでた。途中、用務員さんも土起こしを手伝いに来てくれたので、大量の土と一緒に土をふるうことができた。興味関心をもったことや気づいたことを友達と話したり、友達や保育者や他の職員と共に力を合わせて目的に向かって取り組んだりする姿もみられてきている。
- ・種を植えるとき、大きさや形に興味をもって見ていた。いろいろな種があることを知り、自分で種を選び植えて、水やりをして、芽が出てくると、喜んで観察していた。芽の形や葉の形などの違いに気づいて友達と話す姿もみられた。
- ・4歳児のA児は、毎日、自分が植えたポットを観て、芽が出た、つぼみが付いた、花が咲いたと成長を楽しみに見て保育者に伝えたり、保護者に「私のかわいいフレンチマリーゴールド咲いてん」と喜んで伝えていたりしていた。
- ・夏休みには、トウモロコシが成長し、穂をつけ実をつけていることに喜んで見たり、トウモロコシに、イナゴがたくさんとまっているのを見つけて喜んだりしていた。また、「なんで、トウモロコシにばかりイナゴがいるんやろ。」と不思議

議に思い友達に話す姿もあった。

・園舎工事途中の様子を伝えると、「暑い中、ありがとうやな。」と工事現場で働いている人のことを思う言葉も出て、みんなで応援メッセージを絵で描き贈った。現場で働いている人たちに思いをはせ、その立場に立って考えることができる子どももいる。またその子どもの言葉に共感し、同じように考えることができる子どももいる。

### 3. めざす子どもの姿

- 身の回りの自然に興味・関心をもち、関わっていく中で自然を愛し大切にしようとする子ども。
- 人や社会のために役立つことを喜びとして感じ、まわりの人たちと協力して取り組もうとする子ども
- 「みんなのためになる」「みんなが笑顔(幸せ)になる」という視点を持ち、人の喜びを自分の喜びとして感じる子ども。

### 4. 活動のねらい

- 種の形や大きさ、葉の形の違いに気づき、土や水、太陽の光が植物の成長に必要であることを知る。
- 花が「人の目を楽しませる」「花があると気持ちが明るくなる」など、生活に役立つことを知る。  
(知識および技能の基礎)
- 「花壇に花がない」という現状から「どうしたらよいか」を考え、友達と一緒に解決方法(種を植える)を導き出す。
- 育った花を見て「うれしい」「きれい」と感じ、その思いを自分なりのことばや表現で伝えようとする。  
(思考力・判断力・表現力の基礎)
- 種から芽が出て育つ過程を通じて、生命の不思議さや大切さに気づき、慈しむ心を持ち、愛着をもって世話をする。
- 花が咲くことや花壇に植える未来を楽しみに待ちながら、継続して取り組む意欲をもつ。
- 自分の行動が人を喜ばせることに気づき、「役に立つ喜び」を味わう。  
(学びに向かう力・人間性等)

### 5. 評価規準

知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな種や球根があることを知っている。</li> <li>・腐葉土(コンポスト)について知っている。</li> <li>・種や芽の変化に気づき、関心をもって観察している。</li> <li>・植物の育ちに必要な水・土・光の存在に気づいている。</li> <li>・水やりや土の扱いなど基本的な育て方を実践できている。</li> <li>・毎日の世話の必要性を理解し、自ら取り組もうとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・花壇に花がないことに気づき、友達と一緒にどうすればよいか考えている。</li> <li>・「どうすれば芽が出るか」「どうやったら元気に育つか」を考えている。</li> <li>・成長の変化を自分の言葉・絵・身振りなどで表現している。</li> <li>・育ちの違いを比べ、理由を考えようとしている。</li> <li>・「どんな花が咲くかな」「咲いたら誰が喜ぶかな」「花壇にたくさんの花が植わると、みんながきれいと言ってくれるかな」と未来や他者を想像している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育てている植物に愛着をもち、大切にしようとする気持ちをもって世話をしている。</li> <li>・異年齢の友だちと協力したり、教えたり学んだりしている。</li> <li>・「みんなのため」「人が喜ぶから」と考えて行動している。</li> <li>・成長や人の喜びを自分の喜びとして感じている。</li> <li>・「またやりたい」「次はこうしたい」と次への意欲につなげている。</li> </ul>

## 6. 環境構成

### ○活動の設定理由

園で長い時間過ごしているなかよしタイムの子どもたちは、夏の暑い日に工事作業をしていることや夕方まで工事のクレーン車が動いていることを、登降園中や仮園舎から見て知っている。夏休みに、工事中の園舎内の写真を見て、暑い中工事をしてきている人のことを思って、その姿のカッコよさ、暑い中働いていることへのねぎらい、新しいこども園になることを楽しみにしていることを、絵やメッセージで伝えた。工事現場の人へ思いをさせ、相手を思いやる気持ちが育っていると感じた。また、年下のりす組に昨年採取した種を届ける活動においても、相手のことを思っている姿もみられた。

1学期にも、土づくりから始め、いろいろな植物を育てたことにより、興味関心をもってよく観察したり成長を楽しみにしたりする姿もあり、異年齢の友達と、それぞれに感じたことを伝える姿もあった。

そこで、工事中の園舎の花壇に花がないことに気づいた園児が「自分たちで花を植えたい」と思ったことをきっかけにし、自分たちで育てた花を花壇に植える体験を通して、命を育てる喜び・人や社会の役に立つ喜びを実感できるようにしたいと考えた。異年齢の友達と一緒に活動することで、互いの姿に刺激を受け合いながら協力したり、気づいたことを伝えたりしながら、多様な人と力を合わせて取り組む充実感も味わってほしいと考えた。

### ○教材について

- ・花の種、苗、球根：子どもが選べるように数種類用意 秋から春にかけて咲くものを一緒に調べる。  
(キンセンカ・ノースポール・ビオラ・パンジー・ジュリアン・ストック・アマリリス・クロッカス・ムスカリ・ラナンキュラスなど)
- ・土：園長先生がコンポストで腐葉土を作っていることを教えてもらい、栄養には何が必要か知り、つくる。
- ・スコップ・ふるい・じょうろ：数をそろえて異年齢で協力できるようにする。  
(今回このように考えていたが、なくても他のもので代用し、力を合わせる姿もみられた)
- ・花壇用の看板や名札：子どもたちが絵や文字で記入。
- ・成長記録を iPad で撮影し掲示もしくは提示する：経過観察・生長を楽しみにできるようにする。

### ○展開の工夫

- ・新しい園舎に期待を寄せ、完成を楽しみにしながら、自分達でできることを一緒に考える。
- ・花を育てる以外にも、自分達でできることで、誰かのためになる、みんなのためになることにつながることを、機会をとらえて、活動に取り入れる。(演奏会のお礼の花束作り、運動会の前日準備のお手伝い、年末の大掃除など)

## 7. ESD との関連

### ○活動を通して養いたい ESD の視点

#### I 多様性(いろいろある)

- ・花の種類や種にいろいろな色や形、大きさがあることに気づく。
- ・花や自然の命を大切に作る気持ちを育み、異年齢の友だちと協力し合う経験を通して、人や自然の多様性に気づく。
- ・花の色や形、育ち方がそれぞれ違うことに気づく。
- ・子ども同士も年齢や得意なことが違い、その違いを認め合いながら取り組む。

#### II 相互性(関わり合っている)

- ・花は土・水・光がそろって育つことを体験する。
- ・花が咲くと虫や人、地域の人との関わりが広がることに気づく。

#### III 有限性(限りがある)

- ・種や土、水が大切な資源であることに気づく。
- ・一日世話を忘れると花がしおれるなど、「命には限りがある」ことを実感する。

#### IV 公平性(一人一人大切に)

- ・異年齢の中でそれぞれの役割が尊重される。
- ・種や球根、育て方など、自分の希望を選ぶことができる。
- ・誰もが花壇を楽しめるように世話をする。

## V 連携性(力を合わせて)

- ・異年齢で協力し、力を合わせて花壇を整える。
- ・友だち・先生・保護者・地域の人ともつながりを感じながら進める。

## VI 責任性(責任を持って)

- ・毎日の水やりや世話を通して、継続して花を育てる責任感をもつ。
- ・自分たちの活動が、園の環境、周りの友達や地域の人に影響することを感じる。

## ○活動を通して育てたい ESD の資質・能力の基礎

### ① 批判的に考える力

- ・「花壇に花がない」「さみしい」と現状に気づき、ただ受け入れるのではなく「どうしたらよいか」と問う。
- ・自分たちの生活環境を主体的に見直す。

### ② 未来像を予測して計画を立てる力

- ・「花が咲いたらどうなるか」「誰が喜ぶか」を考えることで、未来を想像し、行動が社会に役立つことを実感する。
- ・水やりをして、未来に向けて世話を継続する計画を立てる。

### ③ 多面的・総合的に考える力

- ・花は「きれい」だけでなく「人を笑顔にする」「自然の一部」「虫や鳥を呼ぶ」など、さまざまな価値を考える。
- ・花壇を「自分たちのため」だけでなく「みんなや未来のため」と捉える。

### ④ コミュニケーションを行う力

- ・「花がないならどうしよう?」「どんな種にする?」を話し合い、互いの考えを伝え合う。
- ・花の成長を絵や言葉で表現し、友だちや保護者に伝える。

### ⑤ 他者と協力する態度

- ・異年齢で役割を分担し、互いに助け合って、土づくり・種まき・水やり・植え替えを行う。
- ・「ありがとう」「手伝ってくれてうれしい」と伝え合う。

### ⑥ つながりを尊重する態度

- ・花が人を喜ばせる、虫や鳥を呼ぶ、園舎に彩りを添える、地域を明るくする…といった「自然・人・社会のつながり」に気づき、大切にできる態度をもつ。

### ⑦ 進んで参加する態度

- ・園のため、みんなのために自分たちで考えて、できることしようとする。
- ・水やりや世話を「やってみよう」と自ら取り組もうとする。
- ・花壇がきれいになることを誇りに思い、「また植えたい!」と次につなげる意欲を示す。

## ○ESD で育てたい価値観の基礎

### ① 世代間の公正を意識して行動する

- ・今すぐ咲く花ではなく、種や球根から植えることで、秋や冬を越して春に咲く花など、これから園に来る子どもたちのために環境を整えることにもつながる。
- ・「自分たちがしたことが、これからの人の役に立つ」という経験を通じて、未来の世代にも意識を向ける。

### ② 世代内の公正を意識して行動する

- ・なかよしタイムの異年齢(4歳児と5歳児)が協力し合って種まきや水やりを分担する。
- ・なかよしタイムでの取り組みが、それ以外の友達へも伝わり、同じ時代を生きる仲間としての協力や公平な関わりを学ぶ。

### ③ 生態系や自然環境の保全を重視する

- ・種から芽が出て、土・水・光によって生きることへ気づく。
- ・「花が育つと虫や鳥も来る」という自然界のつながりに関心をもつ。
- ・命を大切にすることが環境の保全につながることを体感する。

### ④ 人権や文化を尊重する

- ・みんなが「誰のために植える?」と考える中で、友達、先生、保護者、地域の人など、さまざまな人の存在を意識する。
- ・「見てもらってうれしい」「きれいと言ってもらった」などの経験を通して、自己肯定感や他者を尊重する姿勢を育む。

・協働して共に環境を整えることの心地よさを感じる。

### ⑤ 互いの幸福感を尊重する

- ・自分が花を育ててうれしい、そして「見て喜んでくれる人がいる」という相互の幸福感を体験する。
- ・役立つ喜びを分かち合うことで、人と人とのつながりを大切に作る心が育つ。
- ・自分の幸せが他者も幸せにもつながることを喜ぶ人間性につながる。

### ○達成に貢献できる SDGs

#### 目標 3:すべての人に健康と福祉を

- ・花や緑のある環境が心を豊かにし、子どもたち自身や園生活の健康的な環境づくりに貢献。
- ・花や緑のある環境で心が安らぎ、子どもも大人も健やかに過ごせる。
- ・花壇を整える活動を通して、子どもが心身の健康につながる体験をする。

#### 目標 4:質の高い教育をみんなに

- ・異年齢での協働・主体的な体験を通じて、ESD(持続可能な教育)を実践。
- ・自然との関わりを通して、知識・技能だけでなく思考力・判断力・人間性を育む。

#### 目標 11:住み続けられるまちづくりを

- ・花壇を整えることが、園や地域の環境をよりよくすることにつながる。
- ・園舎の花壇が整うことで、園や地域が美しく、安心できる環境になる。
- ・子どもたちの行動が地域社会の環境づくりに貢献する。

#### 目標 12:つくる責任 つかう責任

- ・限られた種・土・水を大切に使い、命・資源を無駄にしない姿勢を学ぶ。
- ・継続して世話をし、最後まで責任をもって育てる経験となる。

#### 目標 15:陸の豊かさを守ろう

- ・植物を育てる活動を通して、生物多様性や自然環境の大切さに気づく。
- ・植物を育てることで、生態系や自然の循環を体感する。
- ・花が咲くことで虫や鳥などの生き物とのつながりを実感する。

## 8. 構想と展開

「子どもが自分で気づき、自然や環境に関わり、未来へつなげる力を育む」

自分たちの行動が「人を幸せにできる」ことに気づいてほしい

予想されるこどもの活動	保育者の環境構成と援助
気づき 子どもが「花壇に花がない」と自ら気づく。 → 自然や環境に関心をもつきっかけ。	○工事中の園舎の写真を見て、花壇や「花がない」ことに気づいた気持ちを共有する。花がないことに気づいたことをきっかけに、自分達で何かできないか一緒に考え、よりよい環境をつくろうとする気持ちをもてるようにする。
計画と準備 どんな花を植えたいか話し合う／栄養の土を作る。／コンポストについて知る。／種や苗を選ぶ／育てる。 → 自分たちで考え、選択し、協力する経験。 育てたい花の種を選び、友達とグループになり、一緒に植える。	○どんな花を植えたいか話し合い、種や苗を準備するために、図鑑やインターネットで一緒に調べる。花や育て方など、自分たちで決めることができるよう、いろんな種類の花や種・球根などを例示する。 ○異年齢ペアや小グループで水やり・世話をするやり方を決め、異年齢で協力し、互いの存在を認め合いながら取り組める

<p>栽培・世話 水やり・観察・成長記録。 → 命の大切さや、持続的なお世話の必要性を目で見て感じる。</p> <p>植栽 育った花を花壇に植える。周りの人たちがそれを見て喜んでいる姿、言葉を聞く。 → 園舎を彩る・地域の人も見ると。社会的つながりを感じる。</p> <p>振り返りと共有 「花があるとどんな気持ちになる?」「みんなが言ってくれた言葉で嬉しかった言葉は?」「どうして世話が必要だった?」など話し合う。</p>	<p>ようにする。</p> <p>○責任をもって水やりを続けたり、育ちの変化に気づいて互いに伝えあったりする姿を認め、友だちと協力して活動する喜びを味わえるようにする。</p> <p>○花が育ったらみんなで花壇に植え、花壇をみんなで眺め、「みんなよろこんでくれるかな」「きれいって言ってくれるかな」と予想したり、自分達の行動が、みんなの喜びにつながることを実感できるように、花壇をいろんな人に見てもらおう機会を作る。</p> <p>○自分も周りの人もうれしい気持ちになった、幸せな気分になったことを振り返り、「来年もやりたいね」「次は何を植える?」と未来につなげる。</p>
--	---

## 9. 振り返り記録

### エピソード① お花植えてたところがない!

【7月30日 花壇がなくなっていることに気づく

自分たちのために頑張ってくれている工事現場の人にメッセージ】

前日、職員で工事現場の様子を見に行き、写真を見せながら子どもたちに伝えると、

「こども園に来るとき、毎日見てるで。」

「前にあった鉄棒がない!」

「お花植えてたところがない!」

「お花ぜんぜんない!」

「うんていもない!」

と、子どもたちは気づいたことを口にしていった。その中で

4歳児 A 児:「暑いのにありがとうやなあ。」

とつぶやいた。

保育者:「ありがとうを伝えるにはどうしたらいい?」

の問いかけに、

「お手紙を書いたらいい!」

「絵を描いて暑いのに頑張ってくれてありがとうってかく!」

「かっこいいねってかく!」

という声が上がると、メッセージポスターを作ることになった。

自分達のために園舎を作ってくれている工事現場の人達に思いをはせて、会ったこともない人たちのことを

思い、一生懸命に絵を描き、メッセージを考えていた。

絵を描きながら、「暑いのにありがとう」「はんしっかり食べてね」「かっこいいよ」

「楽しみにしているよ」などなど、ひとりひとりのメッセージも添えて、ポスターにした。

保育者:「花壇とお花のところがないのは、どうしたらいいのかなあ。」

とつぶやくと、

5歳児 B 児「お花ないのさみしい。」



5歳児 C 児：「お花の場所つくったらいいやん。」

4歳児 D 児：「また種植えたら、お花咲くで。」

4歳児 E 児：「みんなでお花植えよう。」

と、自分達でやりたいという話になった。

後日、子どもたちに、園長先生が工事現場の人達にメッセージを届けてくれたことを伝え、「なんて言ってた?」「よろこんではった?」「飾ってくれてるの?」とたずねる子どもたち。

「工事現場の事務所に飾ってくれてるねんて。子どもたちが描いてくれたですか!嬉しいです!工事張り切ります!がんばります!って言ってくれてたんだって。」と話すと、「えー!そんなふうに言ってくれてよかった。」「飾ってくれてるの嬉しい。」「暑い時、水分補給しはったわ。」「あー、よかったあ。」など嬉しそうに話す。

### [考察]

園舎改修という生活環境の変化をきっかけに、子どもが主体的に環境や他者に目を向け、子どもたちに工事中の園舎のことや、そこで工事に携わっている方たちに思いを寄せてほしいというねらいから、話をした。その中で、まず、子どもたちは「鉄棒がない」「お花植えてたところがない」といった環境の変化に自ら気づき、それを言葉にして共有していた。これは、身近な環境に主体的に関わり、変化を捉える力が育っているととらえることができる。「違い」に気づくことは、思考の芽生えとして重要であると考えられる。

次に、4歳児 A 児がつぶやいた「暑いのにありがとうやなあ」という言葉からは、自分たちの生活が多くの人の働きによって支えられていることへの気づきがあがえる。工事現場の人たちと直接会ったことがなくても、その存在を想像し、感謝の気持ちをもつ姿は、ESDの視点である「相互性」や「他者への尊重」が育ちはじめつながっていくのではないだろうか。

さらに、感謝の気持ちを「どう伝えるか」という保育者の問いかけに対し、子どもたちは自ら方法を考え、絵や言葉でメッセージを表現した。この過程では、思いを表現する力だけでなく、「伝えることで相手に届く」という社会的経験が生まれている。後日、工事現場の人からの反応を知った際の子どもの安堵や喜びの姿からは、自分たちの行動が他者に影響を与えたという実感、自己有用感の芽生えが確認できる。

また、保育者が「花壇とお花のところがないのは、どうしたらいいのかなあ」とつぶやいたことをきっかけに、子どもたちは「お花ないのがさみしい」「また種植えたら咲く」と次の行動を自ら構想していった。これは、問題解決を子ども自身が考え、次の活動へとつなげていく姿であると考えられる。

子どもの気づきを丁寧に受け止め、問いとして返す保育者の関わりが、学びを一過性の経験に終わらせず、次の実践へと発展させることにつながる。花を植える活動は、単なる栽培体験ではなく、社会や自然とのつながりを実感し、「自分たちの行動が人の役に立つ」という経験を通して、子ども自身が次の課題として花を植える活動を構想した点は、未来を見据えて行動を選択する力の基礎を育むことにつながっていると考えられた。

### エピソード② やっぱり花壇がないわ

【10月3日 花壇がやはりない どうしたらいいか みんなで考える】

みんなで力を合わせてお祭りを成功させる物語の『もぐらけんせつ ぼんぼこでらのおまつり』（出版：童心社）の絵本をみんなで楽しんだ後、

今、工事中の園舎の話題が出た。登園途中に本園舎を見た子どもたちから、

「きれいになってきたで。」「トラック止まった。」「工事のお兄さんたち頑張った。」「

やっぱり花壇がないわ。」「もうは花の場所ないで。」

などの話が出る。

保育者：「花壇がないのはどう?」と問いかけると、

4歳児 F 児：「なんかさみしい。」

5歳児 G 児：「みんなでお花そだてたらいいやん。」

4歳児 H 児「H ちゃんのフレンチマリーゴールドきれいやったもん。」

という話になる。



保育者：「花を植えるには何がいるかな」「どうしたらいいだろう」と問いかけると、  
5歳児 I 児：「まだ、栄養の土足りないで。」  
4歳児 J 児：「種もいるで。」「チューリップがいいんちゃう？」  
5歳児 K 児：「こども園大きいから土いっぱいいるで。」  
などの話が出て、自分たちで栄養の土を準備しようという話になる。

#### [考察]

「やっぱり花壇ないわ」という子どものつぶやきは、単なる事実の確認ではなく、これまでの経験や思いを踏まえた気づきの深まりを表している言葉であると感じた。7月に花壇がなくなったことに気づき、さみしさや感謝の思いを経験した子どもたちは、その後も園舎の変化を継続して見続けていた。7月になり、園舎がきれいになってきた様子を喜ぶ一方で、花壇がないことに改めて気づいたことが、「やっぱり」という言葉に込められている。この言葉からは、子どもが環境の変化を一時的な出来事としてではなく、時間の流れの中で捉え、考え続けている姿がうかがえる。また、「ない」ことを嘆くだけでなく、「みんなで育てたらいい」「土や種がいる」と次の行動へとつながっていったことは、環境を自分たちの力でよりよくしようとする主体性の育ちを感じる。このことから、保育者が子どもの小さなつぶやきを丁寧に受け止め、問いとして返してきたことで、学びは途切れることなく継続していくと考えられた。

#### エピソード③ 栄養のふかふかの土の中にミミズはいる？

【10月6日 園長先生から コンポストの話聞いた年長組に栄養の土に何が必要かたずねる。】

年長組(5歳児)の降園前、園長先生からコンポストの話聞いた。  
そこで、年長組に、栄養の土には何が必要か、なかよしタイムの時間にたずねてみた。  
「米ぬか。」  
「くん炭。」  
「給食でてた野菜の皮。」  
「それを干してから土に混ぜんねん。」  
「毎日常かき混ぜるねん。」  
「栄養のふかふかの土ができるねん。」  
など、園長先生から聞いた話を、年長組が年中組(4歳児)にも伝えた。それを聞いた、年中組から  
「栄養の土の中にミミズはいるの？」  
「くん炭ってなに？」  
「米ぬかはどんなん？」  
などの質問が出たので、  
年長組が  
「ミミズはあとでくるかも。」  
「くん炭と米ぬかは、お米の栄養や。」  
など答える姿もみられた。

#### [考察]

園長先生から聞いたコンポストの話を、年長児が自分の言葉で年中児に伝える姿が見られた。年長児は、「米ぬか」「くん炭」「野菜の皮」「毎日常かき混ぜる」といった具体的な内容を語り、学んだことを再構成しながら伝えていた。これは、知識を受け取るだけでなく、理解したことを他者に伝えることで学びを深めている姿といえる。

「栄養のふかふかの土の中にミミズはいるの?」という年中児の問いは、以前に土づくりをした際に、ミミズに関する絵本(『ちっちゃな生きものたちミミズ』出版:化学同人)と一緒に読んで、ミミズが土を柔らかくしていることも知っており、土を単なる“花を植えるための材料”としてではなく、生き物が関わる環境として捉えていることを感じた。

この問いにより、子どもたちの関心は、人（自分たち）だけでなく、土の中の生き物や自然環境へと広がっていった。年長児が「あとでくるかも」と答える場面には、自然は人がすぐに思い通りにできるものではなく、時間をかけて変化していくものだという理解が表れているのかもしれない。

このように、異年齢での対話を通して、資源の循環や命のつながりへの気づき生まれ、ESD が大切にする「相互性」「有限性」「責任性」を実感的に学ぶ機会となっている。

また、子ども、保育者、園長、土の中の生き物、コンポストという循環の仕組みが、ヒト、自然環境、資源、物質、生き物などステークホルダーとして関係し合い、互いに影響しながら学びを支えていると感じた。このような関係性の中で、ESD が目指す「つながりを尊重する態度」が育まれていくのではないだろうか。

#### エピソード④ みんなでやらないと

【11月12日 植える種の話 栄養の土づくり】

11月8日にも土づくりをしたが、引越しが3日後に迫ったこの日、プランターに土が足りないことを話題に出す。

「みんなでやらないと、プランターに栄養の土が入れない。」

「みんなでやったら、できるで。」

という声があがり、みんなでやることになった。

この日のいろいろな子どもの姿

- ・ふるいがたくさんないので、かごを使ってふるう。
- ・土が湿って重たいので、友達と一緒にかごを持ってふるう。
- ・道具が足りないと、自分でスコップやシャベルを持ってきて作業に加わる。
- ・ふるった後の砂利を別の場所に持っていく役割を気づいてする。
- ・幼虫やミミズが出てくるかもしれないと探して、見つけると、観察したり飼育するために何が必要か友達と考えたりしている。

以上のような

友達と力を合わせる姿

道具をうまく使う姿

作業の段取りを考えて行動する姿

自分でできる役割を考えて行動する姿

今までの経験から、幼虫やミミズが出てくることを予想する姿

などが見られた。



#### [考察]

「みんなでやらないと、プランターに栄養の土が入れない」という子どもの言葉は、活動の目的を共有し、協力することの必要性を実感として理解している姿の表れだと感じた。引越しを目前に控え、時間や土の量、道具の数が限られている状況の中で、子どもたちは自然と役割を見つけ、友達と力を合わせて行動していた。

ふるいが足りないときにかごを代用したり、重たい土を友達と一緒に持ったりする姿には、状況に応じて工夫し、他者と協力しながら課題を解決しようとする姿勢が表れている。また、砂利を運ぶ役割や、生き物を探して観察する姿からは、自分にできる関わり方を主体的に選び取る姿が見られた。ESD が大切にする「連携性」「責任性」「相互性」を体験的に学ぶ機会となっていたと考える。

### エピソード⑤ ほんまや、お花ないな

【11月17日 朝 花がないことを実際自分の目で確かめる やりたい気持ちがふくらむ】

仮園舎から引っ越し後、新しくなった元の園舎に登園し、新棟のなかよしタイムの部屋に入ってきた子どもたち。

4歳児 L 児：「きれいやなあ。ここ、なかよしタイムだけの部屋？やったあ！」と、嬉しそうに話す。続いて、  
「せんせい、ほんまや、お花ないな。」と話した。

保育者：「気づいた？」

5歳児 M 児：「どこにも花壇なかったで、柱の道になってたで。」

4歳児 N 児：「そうやったわ。」

4歳児 O 児：「かわいいお花植えたいな。」「また、フレンチマリーゴールドがいいな。」

4歳児 L 児：「違う花でもいいんちゃう？」

4歳児 P 児：「チューリップは？」

保育者：「そうやなあ。引っ越し前に植えられなかったけど、植えたら出てくるかなあ。だんだん寒くなってくるし。」

4歳児 Q 児：「やってみたらいいんちゃう？」

5歳児 M 児：「いけるかも。」

4歳児 O 児：「植えてみたい。」

#### [考察]

実際に、新しい園舎に入り、花壇がないことを自分の目で確かめた子どもたち。子どもたちの気づきが実感を伴ったものへと変化している。「ほんまや、お花ないな。」という言葉には、これまでの経験や話し合いを踏まえた再確認と、状況を受け止め直す姿が表れている。

その後のやりとりでは、「かわいいお花植えたい」「違う花でもいい」「チューリップは？」など、具体的な提案が次々に生まれ、花を育てたいという思いが共有されていった。時期が遅いことを心配する保育者に対し、子どもたちから「やってみたらいいんちゃう？」という言葉が出たことは、結果を予測しながらも、「やってみないとわからない」という挑戦する姿勢が育ってきてようにも思えた。そのような子どもたちの気持ちに励まされ、時期が遅くなったと悩むより、子どもたちの言う通り、やってみないとわからないからやってみようと思った。

この場面は、これまで積み重ねてきた気づきや土づくりの経験が基盤となり、子ども自身が「行動して確かめる」選択をしている姿であり、主体性や未来に向かって試行錯誤する力の育ちが表れた場面であると考えられた。

### エピソード⑥ くしゃみしたら、飛んでいきそう!

【12月3日 遅くなったけど 種植え 種の大きさに驚く】

なかなか種植えができる日がなく、ようやくこの日に植えてみることにした。

秋撒きの種（ストック・パンジー・ビオラなど）を中心に用意していたことを伝え、どの花の種を植えたいか、花の写真を見せた。

保育者：「今日種植えやってみようと思って、秋に植えたらいい種を前から準備していたものを持ってきました。」

「寒くなってきて、もしかしたら、種もさむがって、芽がでてこないかもしれないけど……。どうする？」

5歳児 R 児：「植えてみたらいいんちゃう？」

5歳児 Q 児：「あったかい日もあるし。」「土の中で眠って、春になったら出てくるかもしれへんで。」

他児：「そうやな。」

ということで、種植えをしてみることにする。

保育者：「それじゃあ、植えたい花の種を決めて、4・5歳児ミックスのなかよしチームを作ろうと思います。」

「このグループは、なかよしお世話グループです。一緒に種を植えて、芽が出てくるか観察したり

水やりをしたりするグループです。」

「植えたい種が置いてある、テーブルの椅子に座ってみて。」

と、提案してみる。子どもたちは、花の写真を見て、植えたい花のところに集まる。

育てたい花への思いもあり、4歳児のみ、5歳児のみのグループができたが、その気持ちを優先した。そして、グループごとに写真を撮り、一緒に種を植えた。

袋から出てきた種が、細かく小さいことに驚き、



「えー、ちっちゃ!」

「くしゃみしたら飛んでいきそう!」 「花の種ってこんなに小さいの??」

「春が楽しみやなあ。」

と、話しながら、指で優しくつまみ、土の中に植えた。

### [考察]

種の小ささに対する「えー、ちっちゃ!」「くしゃみしたら飛んでいきそう!」という子どもたちの声から、命の始まりを実感として受け止める姿が見られた。これまで花を育てたいという思いを重ねてきた子どもたちにとって、実際に手にした種は、花が咲くまでの長い時間や環境の大切さを考えるきっかけとなったのではないだろうか。

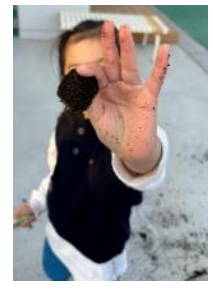
また、「土の中で眠って、春になったら出てくるかもしれへん」という年長児の言葉には、未来を思い描きながら行動する姿勢が表れている。寒さを心配しながらも「植えてみたらいい」という選択をしたことは、不確実な状況の中でも試してみようとする子どもたちの気持ちや態度に、保育者の方が励まされた。今回、どんな花を植えたいか、秋から植えて春に咲く花など、子どもたちと一緒に調べ選ぶところまでできなかったのも、環境に配慮しながら、栽培できる植物について、また一緒に考えてみたいと思う。

指でそっと種をつまみ、丁寧に土に植える姿からは、命を大切に扱おうとする気持ちが感じられ、ESD が大切にする「有限性」「責任性」「未来志向」が体験を通して育まれていることがうかがえる。

### エピソード⑦ ふかふかの土のおふとん

【12月10日 コンポストの土のおすそ分け 土のやわらかさを実感する】

園長先生に、コンポストで作った栄養の土をおすそ分けしてもらおう。土がやわらかいことに気づいて話す。



「土、ふかふかや」

「なんか野菜出てきた。」 「これ、何の野菜かな?」

「土の色違うな」



「あったかおふとんの土かけてあげよう」

## 〈考察〉

今回、ちょうど園長先生がコンポストに取り組まれたことで、なかよしタイムの花を育てる取り組みとのつながり、連携ができないかと考えていた。それぞれが単独で取り組むというより、つながり、連携して取り組むことで、子どもの経験や知識、興味・関心の広がりも期待できると考えたからだ。また、ESD の取り組みとしても、園全体で取り組む実践力が乏しいことが課題とも捉えていたこともある。

子どもは、土のやわらかさやあたたかさに気づき、「ふかふか」「おふとんみたい」と感じたことを言葉で表現し、土の中から野菜のかけらを見つけることで、命のつながりや自然の不思議さへの興味を深めている。そして、コンポストで作った土と、なかよしタイムのみんなで作った土との違いも手の感触を通して感じている姿もみられた。

園長先生からコンポストの話聞き、コンポストで作られた栄養のある土を分けていただく活動を通し、子どもたちの直接的な体験につながり、園内の学びの循環を生み出しているのではないだろうか。それはまた、園全体で取り組んでいる環境教育や食育の一環として位置づけられるものになると考える。

また、コンポストの取り組みは、園での環境への配慮や資源循環の姿勢を可視化するものであり、保護者にとっても、園の教育方針や SDGs への取り組みを理解する機会となる。これは、園・子ども・保護者・地域といったステークホルダーを結び、体験を通した学びを共有する役割を果たしているといえるのではないだろうか。

将来、地域や社会における環境保全や持続可能な暮らしへの意識につながる一つであると考え。

### エピソード⑧ 「冬でも花咲くんや」「花あるとなんか嬉しい」

【12月 日 冬に咲く花をみつけたことでの気づき】

冬休みに入り、冬季保育の期間になり、なかよしタイムで、大学内の「えほんのひろば」に散歩に行くことにした。この日、「えほんのひろば」の入り口前に、赤い花(サザンカ)が咲いていることに気づいた。



5歳児 S 児:「えー、お花咲いてる!冬でも花咲くんや。」

他の子どもたち:「ほんまや」

「寒いのに花咲いてる。」

「なんていう花かな?」

「こどものもり(園庭)にも、

同じようなつぼみあったで。」

「えっ、そうなん?」

「赤色、かわいいなあ。」

と、S 児の発言をきっかけに、気づいたことをそれぞれ話していた。

5歳児 S 児:「花あるとなんか嬉しい。」

と、つぶやいた。



## 〈考察〉

春休み、夏休みも大学内を散歩し、樹木の葉の色、咲いている花を見たり、セミやセミの抜け殻を見つけたり、など身の回りの自然の移り変わりを自分達目で見て感じて、関心を寄せている姿が見られる。

冬休みも、その自然の移り変わりを感じてほしいという思いで、散歩をしている。この日も道中、学内にある樹木や草花の様子に目を止めながら歩き、「この前、ここにニンジンみたいな葉っぱあったのになくなって。」や「葉っぱ、ほとんどないなあ。」「このブロッコリー(カイツカイブキ)は、緑のままやな。」など、変化や様子に気づいて話す姿もみられた。

「冬でも花咲くんや。」というこの気づきは、花は春や夏に咲くものというこれまでのイメージが、実際の自然と

の出会いによって更新された瞬間であると感じた。また、「嬉しい」という感情を伴っている点は、花を知識として理解するだけでなく、身近な自然を心地よい存在として受け止めていることを保育者も嬉しく思った。

これまで花壇がないことに気づき、自分たちで花を育てたいと考え、土づくりや植ええをしてきた子どもたちは、花を「育てる対象」としてだけでなく、「季節や環境と結びついた存在」として捉え始めている。そして、「花があると嬉しい」と感じたことは、自分達が土づくりからはじめ、育てた花が咲いたら、それを見た人がまた「嬉しい」と感じ、見る人の心を豊かにするということをきっと感じとってくれるに違いない。

このような体験は、自然の多様な姿を認め、命とともに生きることの心地よさを感じる学びであり、生態系の多様性の理解と保全意識の基礎を育むことにつながるのではないだろうか。

これからも子どもたちの何気ないつぶやきや感じたことをキャッチし、なぜそのようなことを発したか、感じたか子どもとのそばで考えていきたい。

**10. 成果と課題** 本実践は、花が咲くまでの過程を含めた継続的な取り組みであるが、季節の関係から現時点では活動の途中段階である。そのため、ここでは実践の途中経過として見られた子どもたちの姿をもとに、成果と課題を整理する。

### 【成果】

#### ① 主体性と協働性の育ち (ESD: 連携性・責任性)

花壇に花がないことに子ども自身が気づき、「どうしたらよいか」を話し合い、1学期に花を育てた経験を思い出し、自分たちで花を育てたいという気持ちが芽生え、やってみようとする姿が見られた。土づくり、種まきなどの活動では、異年齢の友達と役割を分担し、声をかけ合いながら協力する姿が育ってきている。

#### ② 自然との関わりを通じた気づきの深化 (ESD: 相互性・有限性)

栄養の土(腐葉土)づくりを通して、土・水・光が植物の成長に必要であることを体験的に理解し始めている。また、ミミズや幼虫との出会いをきっかけに、自然が互いに関わり合って成り立っていることへの関心が高まった。今後、成長の観察や世話を続ける中で、「命を守り育てるには、環境を保全し続ける必要がある」ことにも気づくときがくるのではないかと思う。

#### ③ 他者や社会へのまなざしの広がり (ESD: 公平性・つながりの尊重)

工事現場の人や演奏会で関わった大学生など、直接会ったことのない相手にも思いを寄せ、メッセージや花束を届ける経験を通して、「人を思う気持ち」「感謝を伝える行動」が育ってきた。花を育てる以外の活動で、自分の行動が「みんなのため」につながる経験を通して、役に立つ喜びを実感している。今後、花を育てる活動や自然豊かな環境が、園や周囲の人を明るくすることにつながるという社会的な意味を感じ取ることができるようではないかと考える。

#### ④ 学びのつながり (カリキュラム・マネジメントの視点)

なかよしタイムでの活動が、教育時間や行事、園全体の取り組みと結びつき、学びが連続し循環している姿が見られた。異年齢での継続的な関わりが、学びの深まりを支えていると考える。

### 【課題】

#### ① 季節や見通しをもった計画づくり (ESD: 未来像を予測する力)

「この時期に何を植えるといいか」「いつ頃咲くのか」といった季節性や成長の見通しについて、子どもと十分に話し合ったり、調べたりする機会を十分にもてなかった。今後は、共に過ごす中で、季節を五感で「感じる」ことや「気づき」を大切にしていきたい。その中で、子どもたちから必要となった場合には、図鑑や ICT、家庭との連携を活用し、未来を予測しながら計画する経験を取り入れていきたい。

#### ② 振り返りと言語化の充実 (ESD: 多面的・総合的に考える力)

活動後の振り返りはその都度おこない、「なぜ必要だったのか」「どんな人につながっているのか」といった気づきを整理し、言葉で共有する場を充実させることも意識して取り組むと、なお良かったかもしれない。ドキュメンテーション(写真や掲示)、対話を通して、感じたこと、考えたことなど、学びを子どもたちに分かりやすく可視化していくことやそれをもとにみんなで話す時間の確保、計画性などが課題である。

#### ③ ステークホルダーとの関わり

本実践を通して、子どもたちは自然・人・社会が相互につながっていることを体験的に学びつつある。特に、「自分たちの行動が誰かの喜びにつながる」という気づきは、ESD が目指す持続可能な社会の担い手としての基礎的な資質の育成につながっていると考える。また、ESD を通して、「持続可能な社会をつくる担い手をはぐくむ」という視点を、こども園・

地域・家庭などが共有し、地域や専門家と連携して、取り組みを行っていくことにはまだ課題として残る。

#### ④ 園全体への波及（カリキュラム・マネジメントの視点）

なかよしタイムでの学びを、教育時間や他クラスや年齢層（乳児を含む）へどのようにつなげていくかについては、今後の検討課題である。一日を通して行う「教育及び保育」意識し、園全体で取り組む姿勢や乳幼児期からの連続した学びとして、今後も教育時間となかよしタイムの好循環について考え、再構築していきたい。

#### 【今回の取り組みを通して】

・構想案を立てる段階で、ESD との関連についてそれぞれについて考えていたことで、子どもへの投げかけや援助、心持ちなど意識をもって実践できた。また、それぞれの活動を考察する際もその観点で振り返ることがしやすかった。

・今回立てた目指す子ども像の3つは、大切にしたい視点だと改めて思った。それは、子どもたちもそうなりたいと思っている、そうならうとしているのではないかと、感じたからだ。それを信じ、そばで共に生きたいと思った。そこが、本園の教育・保育目標の「地球の中で」に通じるところになると考える。

11. カリキュラムマネジメントとして

教育・保育目標

[地球の中で] 持続可能な未来に向けて、保育者と共に考え、行動する子ども

[自分から]  
主体的に行動して  
なじみの世界を広げ、  
自分でやったという充実感を  
感じながら生活する子ども

[創造する]  
試行錯誤しながら探求し、  
新しいものや自分なりの考え、  
方法を創造し、表現する子ども

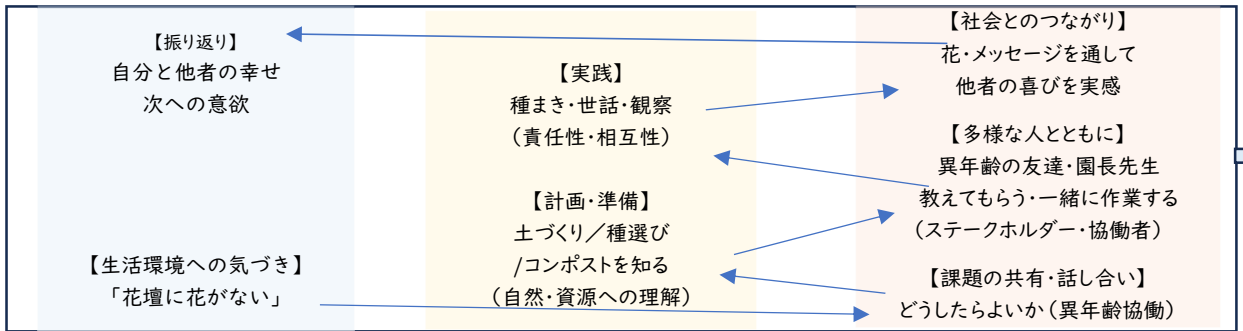
[人とともに]  
ありのままわかいあい、  
わかちあい、  
活かし合う子ども

【地球の中で  
:幸せな未来へ】  
友達や周りの人々と  
共に考え行動し、  
共に幸せに生きる  
主体としての子ども  
の育ち

《教育時間となかよしタイムとの好循環》

本園では、なかよしタイムでは、ゆるやかなつながり(時間、空間、対象、人)を可能とするくらしを基盤に、一人ひとりがやりたい活動に取り組み、多様な人とつながることを通して、教育時間での学びとの好循環を目指している。

『みんなで育てたお花を、新しいこども園を植えよう～自分の行動がみんなの笑顔になる(人の役に立つ)喜び～』  
なかよしタイム(長時間・預かり保育)4・5歳児 約 24名



知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな種や球根があることを知る</li> <li>・腐葉土(コンポスト)について知る</li> <li>・種や芽の変化に気づき、関心をもって観察している</li> <li>・植物の育ちに必要の水・土・光の存在に気づいている</li> <li>・水やりや土の扱いなど基本的な育て方を実践できている</li> <li>・毎日の世話の必要性を理解し、自ら取り組もうとしている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・花壇に花がないことに気づき、友達と一緒にどうすればよいか考える</li> <li>・成長の変化を自分の言葉・絵・身振りなどで表現している</li> <li>・育ちの違いを比べ、理由を考えようとしている</li> <li>・「どんな花が咲くかな」「咲いたら誰が喜ぶかな」「花壇にたくさんの花が植わると、みんながきれいと言ってくれるかな」と未来や他者を想像している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育てている植物に愛着をもち、大切にしようとする気持ちをもって世話をしている</li> <li>・異年齢の友達と協力したり、教えたり学んだりする姿がある</li> <li>・「みんなのため」「人が喜ぶから」と考えて行動している</li> <li>・成長や人の喜びを自分の喜びとして感じている</li> <li>・「またやりたい」「次はこうしたい」と次への意欲につながっている</li> </ul>

ESD で重視する能力・態度が揺さぶられる子どもの姿(幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿)

- 未来像を予測して計画を立てる力
  - ・「花が咲いたらどうなるか」「誰が喜ぶか」を考えることで、未来を想像し、行動が社会に役立つことを実感する。(自然との関わり・生命尊重/協同性)
- 多面的に考える力
  - ・花は「きれい」だけでなく「人を笑顔にする」「自然の一部」など、さまざまな価値を考える。
  - ・花壇を「自分たちのため」だけでなく「みんなや未来のため」と捉える。(自然との関わり・生命尊重/道徳性・規範意識の芽生え/社会生活との関わり)
- コミュニケーションを行う力
  - ・「花がないならどうしよう?」「どんな種にする?」を話し合い、互いの考えを伝え合う。(自然との関わり・生命尊重/言葉による伝え合い /豊かな感性と表現/協同性)

- 他者と協力する態度
  - ・異年齢で役割を分担し、互いに助け合って種まき・水やり・植え替えを行う。(自然との関わり・生命尊重/協同性)
- つながりを尊重する態度
  - ・花が人を喜ばせる、虫や鳥を呼ぶ、園舎に彩りを添える、地域を明るくする...といった「自然・人・社会のつながり」に気づき、大切にできる態度をもつ。(自然との関わり・生命尊重)
- 進んで参加する態度
  - ・園のため、みんなのために自分たちで考えて、できることしようとする。(自然との関わり・生命尊重/協同性)

- 【めざす子どもの姿】
- 身の回りの自然に興味・関心をもち、関わっていく中で自然を愛し大切にしようとする子ども。
  - 人や社会のために役立つことを喜びとして感じ、まわりの人たちと協力して取り組もうとする子ども
  - 「みんなのためになる」「みんなが笑顔(幸せ)になる」という視点を持ち、人の喜びを自分の喜びとして感じる子ども。

- 《なかよしタイムでの子どもの姿》
- ・昨年度末には、異年齢の友達と1年ともに過ごし交流を通して、一緒に過ごす楽しさを感じている。
  - ・園舎工事の様子や花壇がなくなったことに気づき、身の回りの環境の変化に関心をもっている。
  - ・種を小さい友達に分けて届ける活動を通して、安全や相手の気持ちを考え、思いやりをもって行動する姿が見られた。
  - ・植物や土づくりに主体的に関わり、友達や園内の職員と協力しながら発見や不思議さを共有し、探究心を深めている。
  - ・植物の成長や工事現場で働く人への関心から、命や人への思いやり、周囲への感謝の気持ちが育っている。